

日はまだ昇る 1991年 祥伝社

渡部 昇一（わたなべ しょういち）

上智大学卒、オックスフォード大学留学、上智大学教授。

専門は英語学だが、深い教養に裏打ちされた歴史文明評論は、当代一流。

ロボット大国のかけに

「種まく人が種まきに出た。まくとき、ある種は道ばたにおちたので、鳥が来て種をついばんだ。ほかのは土のうすい石地におち、土が浅いので、すぐ生えたけれど、陽がのぼると、やけて、根がないから枯れてしまった。ほかの種はいばらの中におち、いばらが成長したのでふさがれてしまった。ほかのは、よい地におち、あるいは100倍、あるいは60倍、あるいは30倍の実を結んだ。耳のある人は聞け」（『新約聖書』マタイ伝13章3-9）

去年だったか、一昨年だったか、うちの大学の英文科の新入生といっしょに箱根にオリエンテーション・キャンプに出かけた時のことである。一緒についてきて手伝ってくれる上級生が「鉄腕アトム」の主題歌をうたった。英文科の学生だから、歌詞を英訳して歌った。同じバスの私の隣の席にはイギリス人の先生がいたが、そのやや珍奇な英語の歌を聞いて、「ちょっと奇妙です」と言った。

なるほど奇妙な英語だった。しかし、そのイギリス人が奇妙だと言ったのは英語のことではなかった。日本人の奇妙な英語になら慣れているからわざわざそんなことは言わない。歌の内容が奇妙だ、と言うのである。ロボットが「心やさしい科学の子」というのがおかしいし、「正義の味方」だったり、「人間守って」というのがおかしいと言うのだ。

イギリス人にとってロボットといったら、もっと邪悪なものを連想するのであって、「鉄腕アトム」のようなイメージにならないことである。そう言えばロボットの元祖は人間を絶滅したことになっていた。

だいたい、ロボットという名前からしてよくない連想を持つ。チェコスロバキアの作家カレル・チャペックが1920年(大正9年)に書いた自分の劇にロボットを登場させたのが、人造人間を一般にロボットと呼ぶようになったはじまりである。これは3年後に英訳されて世界中にひろまった。

チェコ語では“奴隸”的ことをロボットと言うそうである。また“強制労働”をロボッタと言うらしい。これは古スラブ語の“奴隸”を意味するロブ、あるいはラブと同根である。ついでに言っておけば、ドイツ語のアルバイトもこれと同一語源である。“忌まわしい労働”というイメージがロボットからは切り離すことができない。しかもチャペックの劇に出てくるロボットは、最後には知性をえて、ついには発明した人間を殺戮するのだから、イメージはますます暗い。

われわれも戦前からロボットの名前を知っていた。そして確かにイメージは暗かったと思う。そのロボットが突如として戦後の日本で愛すべきものになったのである。

日本の戦後の世代で「鉄腕アトム」を知らない者はないであろう。ここにはチャペックの暗いイメージは全くない。愛すべきロボットなのだ。可愛い妹ロボットまでもある。

そのために、日本中の子どもたちは、ロボットはよいもの、人間の味方、明るい未来を作る者、人間を守ってくれるもの、というふうに考えるようになったのだ。この決

定的なイメージ・チェンジをやったのが、手塚治虫氏の天才とヒューマニズムである。

このために日本の工場にロボットが入る時に心理的な抵抗がまるでなかった。工場のロボットは可愛い顔など持ておらず、どちらかと言えばグロテスクである。しかし「鉄腕アトム」で育った従業員たちはそう見ない。「モモエ」とか何とか、好みの女優や歌手の名前をつけているそうである。「鉄腕アトム」を知らない国の人人がそんな話を聞けば、びっくりするに違いない。

ロボットが急に世界的な話題になったのは、『タイム』が表紙特集をやってからである。日本は世界のロボットの8割近くを保有し、ロボットを作るロボットまで作り出している世界一のロボット超先進国であることを、世界中の人々が知るようになつた。「ロボットを作るロボット製造会社」として紹介された富士ファナックは一躍世界的有名会社になり、株価も急騰した。

しかし日本は、元来は決してロボットの先進国などではなかった。アメリカでは昭和の初年に、ウェスチングハウス・エレクトリック社がテレボックスというロボットを開発しており、ずっとロボット先進国だったのである。

しかし広く工場に普及しなかったのは、ロボットというもののイメージが何やら暗かったことが大きいであろう。何しろ「鉄腕アトム」が日本ほど普及していなかつたのだ。

つまりロボットという種は、日本という「よい地に落ち、あるいは百倍」あるいは千倍、あるいは万倍の実を結んだのである。手塚治虫氏は文化勲章をもらってもおかしくないであろう。

今の子どもたちは、「鉄腕アトム」の次の世代だ。つまり「ドラえもん」を読んで成長した日本人である。これもロボットである。実際に心の優しい猫ロボットで、腹の中から奇想天外な発明品を次から次へと出してみせる。「ドラえもん」世代の日本人は珍奇な発明に対して好意的な態度を持ち続けるであろう。このことは、これから日本が、さまざまな面白い発明品の王国になるであろうということの予兆である。

かつて発明発見物語の本場であったイギリス人は、今それほど発明に熱心ではない。したがって新製品がまるで少ない。もしイギリスが発明王国に再びなりたいならば、「ドラえもん」の英訳からはじめるべきではないか、などと考えたくなる。

いずれにせよ、マンガおかげで、気がついてみたらロボットに親しみを持つ国民が出来上がっていたということは、はっきり認めておいてよいことなのではあるまい。

土がよくないと実が落ちても生えない。何かがある国で栄えるためには、必ずその下地というものがあるのである。

日本をロボット大国にしたのはマンガの力が大きいが、もちろんそれだけではない。それは日本の法務省が日本の国籍ということに対して、甚だしく頑固な態度を取ってきたことが大きな要因になっている。

高度経済成長の時代には、どの国も外国人労働者を気前よく受け入れた。イギリスもドイツもフランスもそうである。本当は労働力が欲しかっただけの話だったのと思うが、「これからは多民族国家でなければならぬ」などと、偽善的とも思われるほど人道的に聞こえるスローガンまでつけ加えて外人を入国させた。

その結果が今みるが如き現状である。あの平和的なスエーデンにおいてすら、人種間の暴力沙汰がある。フランスでは共産党の市長が、移民たちの住宅をブルドーザーでぶっこわした。イギリスでは人種間のトラブルどころか、人種戦争の様相を濃くしてきている。今のイギリスの若者の間には「イギリスを多民族国家にしてくれなどと頼んだ覚えはないぞ」と政府を攻撃する声が強まっている。

さらにそれよりも、高度成長がおわったあとの大失業者の問題が焦眉の急である。ロボットを導入しよう、などという雰囲気ではないのだ。

サミットとは先進国7カ国会議のことだが、経済的には「一強六弱」だなどという専

門家もいる。「一強」とは日本で、他の六カ国は深刻な経済不振に悩んでいるというのである。

日本が「一強」と言われる理由の一つは、ロボットの大量導入と、その性能の高さにあることは間違いない。そんなことはほかの国にもわかっているのであろうが、すぐ日本の真似というわけにいかないのである。まず心理的になじみがなく、また直接的に失業者が多すぎる。

幸いにも日本では天才的な漫画家のおかげでロボット愛が国民の間ににあるし、また頑固な法務省のおかげで、高度成長時代に安易に外国人労働者を入れなかつた。この二つの似つかぬものが、ロボット時代のための「よい土」を作つておいてくれたのである。ここにロボット工学の種子が落ちて、豊かな実を結びつつある。

21世紀は日本の時代がどうかは別として、ロボットの時代であろう。本当に「アトム」や「ドラえもん」のようなロボットが出てくれることを期待しよう。

鉄腕アトムがマルクスに勝った。

ソ連ではテクノロジーのメリットを自然征服の手段として考えていたから、自然征服に関係のある技術開発には熱心であった。

宇宙の征服のために最初に宇宙船を飛ばしたり、あるいは敵を攻撃する武器の生産などには熱心だった。

ところが、工場における機械の普及ということは、マルクス主義によれば、これはけっして歓迎されるべきことではない。少なくともイメージにおいて、これは基本的な認識であった。したがつて労働を楽にするとか、あるいは機械の普及が人間の労働をより人間的にするという発想は、そもそも浮かばなかったのである。このギャップが、すなわち機械が、ますます人間を人間らしくすると考えていた自由圈と、機械は窮屈化を進めると考えていた共産圏とのイメージの差が、経済的に巨大な格差を生み、ついに、それがベルリンの壁を壊すところまで拡大したのである。

しかし何度も言うように、10年前は、そんな兆候すらなかった。ソ連は、まだアメリカと充分対応できるどころか、むしろ有利な体制ではないかと、世界中の人々に思わせるものがあった。それが急激に変化したのは、やはり日本のロボットの劇的な発達によってであり、それをのぞいて、原因は考えられないのである。

1989年の共産党大会でゴルバチョフ自身が「社会主义が敗れたと言うよりは、資本主義国家の中に、技術革新があれほど発達するとは思わなかつた」という趣旨のことを言ったが、この場合の技術革新とは、アメリカの宇宙開発や軍事産業のことではなくて、日本を中心にして起こつた民生部門からの技術革新と、その移転を受けた欧米や東アジアの興隆を指していると言つてよい。

日本のロボットのここ10年間の普及は、きわめてドラマティックだった。これが、すべての人の予想を裏切つて、マルクスの誤りを誰の目にも分かるようにした。

原理としては、いま述べたことは初めから分かっていたことであり、西側諸国も、それほど明確に意識したわけではないが、ちゃんと実践してきたことである。だが、日本のスピードは、あまりにも劇的だった。ただし、世界の流れを変えるような技術革新とは、いつの時代でも、たとえば産業革命が世界的に広まつた時期でも、そういうものだったのである。

だから、単なる技術革新だけではソ連や東欧を振り動かすことはなかつた。しかし、それがロボットというかたちで日本に普及したとき、すべてを振り動かしはじめたのである。

ロボットと相性がよかった日本式経営の本質

アメリカにおいても、製造業が空洞化したことは先に観察したとおりだが、なぜ、製造業において、このように「日本のパラダイム」と「世界のパラダイム」は違ってしまったのだろうか。

ロボットの存在以外に、もう一つ大きな要因を挙げれば、戦後の日本企業においては、生産性の向上が労働者の解雇を意味するものではない、というイメージが定着した点が重要であろう。そのために、ロボット導入に対して職場からの反対がまったくと言ってよいほどなかった。

いくらロボットに対する親近感があったとしても、その導入によってクビを切られるのでは、やはり反対が強くて当然だ。しかし、クビを切らないという企業制度が確立していたため、愛すべきイメージのロボットを、愛すべきものとして受け入れることができたのである。

では、このイメージはどうしてできたのか。

それは、私は思想家であり哲学者である松下幸之助によるものだと思う。

思想家・松下幸之助などと言うと、奇異に感じられるかもしれないが、これも漫画や浮世絵と同じことが言える。日本のアカデミックな哲学者や思想家が、松下幸之助を、たとえば『日本近代思想史』といった内容の本で採りあげることはまずない、といつてよい。

しかし、アメリカではまったく様相を異にする。「ライフ」は、松下幸之助を「金持ち、企業家、出版社社主、著者、思想家・哲学者」と五つの要素を挙げて紹介した。

なぜ哲学者かについて、その理由は詳しく書いてなかったが、私は松下氏が哲学者として紹介されたのは、彼が西洋にはない独創的な考え方を導入したからだと思う。

彼は、戦後「PHP」という出版社を作った。ピース・アンド・ハピネス・スルー・プロスペリティー、つまり「繁栄を通じての平和と幸福」という意味である。

これは思想としては、おそらく釈迦、孔子、ある意味ではキリストに相当する思想だと思う。なぜなら、平和と幸福というのは、あらゆる宗教上の偉人が教えたし、あらゆる聖者、たとえばガンジーなども実行しようとした。無数の修道院その他も、これを目標とした。

しかし、平和と幸福だけならハシシを吸っても達成される。それが極端なかたちで現われたのはヒッピーで、彼らは麻薬でピース・アンド・ハピネスを得ようとした。これが、いまも尾を引いて、麻薬問題は現代アメリカの抱える最大の難問となっている。麻薬を吸えば、とにかく心の平和と幸福感はもたらされる。しかし、それは繁栄をもたらさない。むしろ個体を破壊し、社会の繁栄を破壊するほうに働く。

ところが松下幸之助は、この点に関して彼独自の哲学、人生観を示した。つまり、宗教というものは、いま努力し、将来の心の平和、あるいは来世の幸福といったものを得ようとするものである。しかし企業が繁栄すれば、来世を待たずして、この世で平和も生活の糧も幸福も得られるのではないか。また、そういうかたちでの繁栄が望ましい、という発想であった。

死んでからのこととは一応分からないとし、それは何かに任せることにして、この地上に天国に準ずるものができるとすれば、それは「繁栄による幸福と平和」ではなかろうか。繁栄によらない幸福と平和は駄目だし、繁栄だけでも、幸福と平和がなければ駄目である。

そうすると、幸福と平和がもたらされるような繁栄は何であるかが重要となる。と、当然、企業が繁栄しても、労働者がクビを切られたり悲惨であったりしたのでは意味がない。企業が繁栄するようにみんな努力しながら、その繁栄に参加した労働者たちも、幸福と平和が得られるようでなければならない。これが松下幸之助の抱いた理念だった。

言葉にすれば簡単なことだが、あらゆる哲学、あらゆる思想は、この程度の簡単な言葉になりうるものだ。また、簡潔にまとめられないようでは、優れた思想とはみなしにくい。と同時に、世界のパラダイムから見た場合、まことに独創的な思想であり、松下幸之助の思想は、ある意味で釈迦などに相当するものだ、という認識を持たなければいけないのでないだろうか。

これを松下氏は、昭和の大不況、すなわちアメリカのホーリー・スムート法によって惹き起こされた世界的大不況のときに、ほとんど世界でただ一人実行した人物なのである。

当時、もちろん松下電器にも不況の波は押し寄せた。そのとき世界中の資本主義国の企業は、労働力の削減によって、つまりクビ切りによって生き残るという、当然のことを行なった。要するに、マルクス主義の正当性を証明するかのような冷酷な対応を世界中がしたのである。

ところが松下氏は、わが社も不況を乗り切るためにクビを切らざるをえない、との報告を受けたとき、即座にそれを拒否して、仕事がないのなら掃除でもすればよいという発想に立ち、クビ切りに断乎反対した。ほかの会社とちがい、うちの大将はクビも切らない、給料も下げないということが分かったとき、不況の真ん中にあって、松下の従業員は本当にピース・アンド・ハピネスを実感した。そこで、一丸となって頑張ったために、少なくとも松下に関するかぎり不況は、たちまち克服され、繁栄がもたらされたのである。ついでながら付け加えておけば、松下氏は水道から水が出るのを見ていて、豊富に生産するための基本イメージを得たとのことである。

戦後の日本の企業は、松下氏を意識して真似たわけではないだろうが、法律とからみもあって、原則的にたいていどこも松下式に落ち着いた。これが、今日、日本式経営と言われるもの本質であるが、これが、まことに幸いなことに、最も先端的なロボットと相性がよかつた。そこで、日本の生産現場で働く人々は、恐れることなく最新の機械、特にロボットが入ってくることを歓迎した。それによって単純労働、汚い仕事、危ない労働は片っ端からロボットに任せられるようになった。それのみならず、ロボットは人間のできない精密な仕事をしてくれることも分かり、この分野は一気に進歩したのである。

日本におけるロボットの大成功は、日本独自の二つの土壤がもらしたわけで、まことにうれしいかぎりである。

再び繰り返せば、一つは、通常、世俗的なものとしてエリート階層などが顧みようとしない漫画が、ロボット導入の裾野を国民的な規模で広げてくれたこと。そしてもう一つは、日本が世界に誇るべき哲学である「PHPの精神」、あるいは「日本式経営の精神」と、ロボットがうまくマッチしてくれたことである。しかもこれが、今後とも日本の繁栄を支える二本柱となりつづけてくれるわけで、“日は、まだ昇る”と、私は日本の将来を樂観しているのである。

「平等の限界」を決めることが重要性

商法というのは、基本的に自由という概念があるから、ある意味では厳しい。

手形を落とせなければ、どんな理由があっても破産の憂き目に遭う。おやじが死んだから、この手形を待ってくれと言ってもダメである。いちいち理由を聞いていたら成り立たない。だから、商法の世界では信頼できるのは自己の判断のみで、その判断の背景の事情は聞いてはくれない。自由にはそういう厳しさがつきものであるが、それでも、自由を尊重した社会にならなければいけないというのが、現代の世界的な流れなのである。

したがって、日本は将来も自由化をどんどん進めるべきなのだ。

すると、平等という概念はどうなるのか、という疑問が当然、湧いてくる。たしかに、この要素を外してしまうわけにはいかない。それが「平等の限界」をどこに持っていくかの議論であるが、その基本は「最低生活水準」ということになるだろう。

また、この「最低生活水準」をどこに置くかも議論の分かれるところだが、これは、その時代とか社会の状況によって変わるものである。

したがって明確なことは、自由にウエートをかけながらも、その社会から零れ落ちた人も死んだりしないように、サーフィスにおけるセーフティ・ネットのような機能を果たす存在を用意する必要があり、その概念的な寄り所が「平等」だということになる。つまり、「平等」は「自由」の従であるという原則を、あくまで崩してはならないのである。

自民党の自由と民主は矛盾しないが、これが自由平等党なら分裂症である。社会党は平等党だが、平等の要素が野党にあるのはセーフティ・ネットが存在することであり、それはそれでよいことだ。しかし、与党に平等があつては、国が経済的におかしくなることを意味する。繁栄を大切と考えるなら、与党は自由を大切にする党であるべきなのだ。才能を伸ばし、ルール(法)を破らないかぎり儲けたい者はどんどん儲ける。発言したい者は自由に発言せよ。研究したい者は、イデオロギーや常識にとらわれず研究せよという姿勢を主にして、そこから溢れ落ちた人たちに対して、最低限度の保障をちゃんとするような社会が、健全な国家というものなのである。

だが、必ず「もっと平等に」という声が出てきて、自由競争や自由な発言を圧迫する力が働くのが戦後の日本社会であり、これはまた“人情の自然”的にしからしめるところでもあるだろう。しかし、平等はシビル・ミニマム(最低限の保障)でなければいけない。シビル・ミドルまで平等の原理を用いれば、自由は殺され、経済はおかしくなる。これは、イギリスの近代史・現代史が如実に物語っている現実でもある。

「もっと平等に」の運動は、オーウエルの『動物農場』のごとく、「他の人たちよりもっと平等な人たち」つまりルーマニアのチャウシェスク一族みたいなものを作ることになるだろう。

自由、平等、博愛といったフランス革命のスローガンは、まだ今日の社会のあちこちに影響を残している。だが、われわれは大切にする順番を狂わせてはいけない。博愛はいかなる体制でも重要な概念であるが、平等は自由の欠点を補う従的なものでなくてはならない。「自由」主、「平等」従という大原則を崩してはならないのである。

なぜ、明治天皇は近代化に成功したか

明治維新とは復古運動だったはずである。しかし、明治天皇がやったことは近代化運動そのものだった。

近代化のための近代化というスローガンを表看板にしていれば、きっと王朝はもたなかつたことだろう。これは、イランのパーレビ王朝を見ても分かる。パーレビ国王は心の底から近代化を願い、石油の金で近代化をどんどん進めた。すると、原理に帰れというイスラム教の復古運動がすさまじい勢いで起こり、ホメイニに、たちまちひっくり返ってしまった。

日本でも、もしも近代化のための近代化をやっていれば、おそらく暗殺その他が横行し、何もできなかつたことだろう。ところが、明治天皇は心の底から復古を願われた。また、元勲たちも復古を旗印にした。事実、古来絶えていた儀式を盛大に復活させた。明治天皇自身、きわめて神を敬う念が強く、厳粛にそれを行なわれたそうである。明治天皇は牛乳が好きだったそうだが、宮廷で儀式のあるときは牛乳も飲まれず、身を清めることに専念されたと、大正天皇のご生母である柳原二位局は書き記しておられる。

そのようなことだったから、いくら明治天皇が近代化を進めても、これを復古派が非難することはできなかった。明治天皇は、自ら公式の場では軍服を召され、晩餐会はフランス式になさった。これに対して本来ならば激烈なる反対があつてもよいのだが、復古運動を進めておられる方自身が洋服を着、牛肉を食べられたので、日本人もごく自然に洋服を着、牛肉を食べるようになった。しかも食べてみれば、牛肉はまことにおいしいということになって普及した。

衣服や食事を国家規模で変えることがいかにもむずかしいかは、今のユダヤ教、ヒンズー教などの食物禁忌を見れば分かる。しかし、日本では、明治天皇の復古運動とワン・セットになって簡単に実現したのである。端的に言うと明治天皇のやられたことは、ホメイニが、パーレビのやったことをやつた、と言うに等しい。つまり、成り立つはずがないことをやっていると、それが自然に定着し、結果的に成り立ってしまったということで、これも逆説以外のなにものでもない。「一見成り立つはずがない。しかし、それでなければ成り立たない」——これこそ、パラドックスの持つ基本図式だが、だからこそコロンブスのアメリカ発見以来の500年の間で、欧米以外の国で、自力で近代化に成功したのは日本だけだった、と言えるのである。